

古代淡路島の土器製塩研究の現状と課題

伊藤 宏 幸

はじめに

人が生きていくうえで欠くことのできない塩。その大切な塩を手に入れるため、岩塩に恵まれないう日本列島では、古来、海水の水分を蒸発させることによつて塩を手に入れてきた。その際、土器を用いて海水を煮詰め、結晶塩を得る方法を土器製塩とよぶ。

土器製塩の工程には、事前に海水を濃縮し、塩分濃度を高めた濃い塩水（鹹水）を作る採鹹工程。塩分濃度を高めた鹹水を煮沸し、結晶塩を作る煎熬工程。煎熬作業によつてできた潮解性の高い粗塩を再加熱し、にがり除去することで行いやすい塩を作る焼塩工程があつたとされている。

採鹹工程には様々な方法があり、時代によつて異なる。砂浜に海水をくみ上げ、太陽熱を利用して水分を蒸発させて塩分濃度を上げる塩田方が良く知られており、揚浜式や入浜式などの方法がある。万葉集などには、「藻塩焼く」といった記述がみられることから、古代には海藻を使つて塩分濃度を高める藻塩法などもあつたと考えられている。

煎熬工程や焼塩工程では、鹹水の煮沸や粗塩の再加熱に製塩土器とよばれる塩づくり用の土器を使用するが、後には煎熬工程に鉄製の塩釜を使用する方法へと進歩したとされている。煎熬過程で用いられる製塩土器は一度きりの使用で破棄されることから、煎熬作業を行った場所（製塩遺跡）では、壊れて破棄された製塩土器が大量に見え

れる。

日本列島における最古の土器製塩は、縄文時代に遡る。関東地方の茨城県霞ヶ浦周辺や東北地方の宮城県松島湾周辺で、縄文時代後期～晩期に営まれた製塩遺跡が発見されているが、この地域での土器製塩はその後の時代に継続しない。一方、西日本における土器製塩は、弥生時代中期後半、備讃瀬戸とよばれる岡山県と香川県の沿岸部や島嶼部が始まり、その後、大阪湾沿岸や西日本各地に広がることとなる。淡路島の土器製塩もその系譜の中で営まれたものと考えられる。

一、淡路島における土器製塩研究の歩み

淡路島の土器製塩について論を進める前に、島内の土器製塩研究の歩みを振り返っておきたい。

淡路島で最初に発見された製塩遺跡は、一九六一年に発見された高崎遺跡とされている¹⁾。一九六六年、その後に発見された遺跡を加えた六遺跡の資料を、石部正志、白石太一郎らが調査。石部正志は、島内の製塩土器を 類から 類に分類し、

その特徴と時期を考察した²⁾。一九七〇年には岡本稔が石部の分類に基づき、一一か所に増えた遺跡で出土する製塩土器を分類するとともに、各遺跡の状況を詳しく報告している³⁾。

一九七三年には、製塩遺跡としては島内で初めて発掘調査が行われることになる重要な遺跡が発見されている。山下町居屋敷遺跡と旧城内遺跡である。一九七四年に発掘調査が行われた山下町居屋敷遺跡の報告書では、田村昭治が石部の分類に一部修正を加え、島内一九遺跡の製塩土器を七型式に分類。伴出する遺物や他地域の例を参考に淡路島の製塩土器編年を試みている⁴⁾。

一九七四年には、淡路考古学研究会が中心となって沼島の考古学的調査が行われた。この調査では、製塩遺跡の確認には至らなかったものの、脚台式と厚手丸底式の製塩土器が採集され、ノダラの浜で六世紀後半の須恵器が出土する土層が確認された。淡路島の南東海上に浮かぶ周囲約十キロメートルの島は、多くのおのころ島伝承を持ち、海人族との関係が指摘される重要な島であり、その全島を対象とする調査は、淡路島の土器製塩を理解

する上においても重要な調査と評価できる。

一九七七年には近藤義郎が来島。島内の製塩土器を実見し、型式毎に紀伊や和泉、備讃瀬戸など周辺地域との類似性や相違点を指摘している⁽⁵⁾。後に近藤は著書の中で、淡路島における土器製塩の始まりを弥生時代後期とし、製塩土器の特徴について他地域との比較検討を行い、淡路の土器製塩の特徴を分析した⁽⁶⁾。

一九七〇年代後半から八〇年代にかけては、淡路島北部において、ほ場整備事業に伴う発掘調査が増加し、楠本塩入遺跡、井上遺跡、猪ノ尻遺跡、舟木遺跡などの遺跡で製塩土器が出土する事例が報告された。また、一九七九年から本格的に始まる本四連絡道路（淡路縦貫道）建設に伴う発掘調査では、森遺跡や谷町筋遺跡、釧田遺跡、雨流遺跡などで、古墳時代から奈良時代にかけての製塩土器の出土が相次ぐなど、土器製塩に関する資料が全島的に増加した時期であった。なお、一九八三年の旧城内遺跡の発掘調査は、製塩場内に築かれた箱式石棺が確認され、製塩集団の墳墓のあり方を知る重要な調査となった。

これらの増加した資料をもとに、島内外の研究による土器製塩研究が深められることとなる。

一九八四年には櫃本誠一が、淡路島の製塩遺跡一九か所の資料を分析し、五世紀中頃～六世紀初め、六世紀後半～七世紀前半に遺跡数が増加することに着目し、淡路島の土器製塩に二つの画期が存在することを指摘している⁽⁷⁾。一九八七年には、浦上雅史が島内二七か所の製塩遺跡から出土する遺物を分析。淡路島における土器製塩の開始期を弥生時代後期とし、飯蛸壺の出現期との重なりを指摘するとともに、古墳時代後期にある土器製塩の拡大期を労働形態の変化が背景にあるとするなど、土器製塩を漁撈活動との関係性の中で評価する視点を提示した⁽⁸⁾。さらに浦上は、一九九三年に島内で製塩土器が出土する遺跡三一か所の資料を分析し、脚台式を三型式、丸底式を四型式の都合七型式に分類したうえで島内の製塩土器編年案を提示した。その中では、丸底式は焼塩専用土器とし、胎土に初殻を含む土器や内面に布目圧痕を有するものがあることに着目して、それらが淡路島の製塩土器の特長である可能性を指摘⁽⁹⁾。積山洋も律令

期における消費地と生産地出土の製塩土器を比較し、胎土に初殻を含む土器が淡路産の可能性が高いことを指摘した¹⁰。一九九四年には、近藤義郎編纂の『日本土器製塩研究』¹¹で、岡本稔・波毛康宏が島内の製塩遺跡二八か所の資料を用い、その型式の変遷を提示した。土器製塩研究の集大成ともいえる書籍の中で論考は、淡路島の土器製塩を列島各地の土器製塩の中で位置づけ、評価できる契機となるものであった¹¹。

一九九〇年代は、重要な発見や調査が相次ぎ、日本の土器製塩研究が大きく進歩した一〇年ということができる。その中において、重要な位置づけとなる調査が淡路島内でも行われた。その一つが、一九九五年に実施された貴船神社遺跡の発掘調査である。北淡町教育委員会が実施した調査では、古墳時代後期の石敷炉が確認された。兵庫県下で初めてとなる製塩炉は、土器製塩の実態を知る資料として重要な発見であった。なお、同年、兵庫県教育委員会が実施した発掘調査でも多数の製塩炉が発見され、奈良時代まで継続する大規模な製塩遺跡であることも明らかとなっている。

もう一つが、一九九七年に実施された引野遺跡の発掘調査である。この調査では、製塩土器の形態が脚台式から丸底式へと変化していく様子が層位的にとらえられ、土器製塩研究にとって重要な課題であった古墳時代中期における丸底式製塩土器の成立過程を明らかにした画期的な調査となった。折しも、一九九五年から二〇〇〇年にかけて行われた西庄遺跡（和歌山県）の調査で、丸底式製塩土器初期段階の石敷炉が多数発見されるといった重要な成果も重なり、大阪湾岸を中心とした調査成果が先導する形で、わが国の土器製塩研究が大きく進展することとなった。

一九九〇から一九九二年の三カ年にわたり、兵庫県教育委員会が主体となって実施した製塩遺跡分布調査は、開発事業が増加する状況の中で、製塩遺跡の分布状況を洗い直し、土器製塩の実態を明らかにするとともに製塩遺跡の保護を図ることを目的とするものであった。この調査では、浜田遺跡の確認調査が行われたほか、貴船神社遺跡など、その後の土器製塩研究に重要な役割を果たす遺跡が新たに発見されるなど、淡路島の土器製塩

研究にとって重要な役割を担うものと位置づけられる。

このほかにも一九九三年の岩谷遺跡の発掘調査では淡路島の南端部で製塩遺跡が確認されたほか、一九九五年の釜口浜田遺跡では製塩土器の使用年代を想定できる土師器を伴い、原形に復元できる脚台式製塩土器が出土。一九九六、九七年の並松遺跡では、木簡にみる古代来馬郷との関係が想定できる律令期の製塩遺跡が確認されるなど、重要な調査が行われている。

このような状況の中、一九九五年には「塩の会」の例会が淡路島で開催され、島内の製塩土器や製塩遺跡について検討がなされた。その成果は、一九九七年開催のシンポジウム「製塩土器の諸問題 古代における塩の生産と流通」においても取り上げられ論議されるなど、重要遺跡の発掘調査とそれに伴い増加した資料をもとにした淡路島の土器製塩研究は一定の到達点をみたといえる。

このような考古学的なアプローチ以外にも、淡路島の土器製塩に対する研究がなされている。一九八〇年に岡本稔が記した「藻塩幻想」⁽¹³⁾は、『日

本書紀』に登場する海人と土器製塩との関係に着目し、製塩実験をおとした自身の体験をもとに、「国生み神話」の成立に関する和歌森太郎や岡田精司の説を淡路島の製塩遺跡や遺物から説明しようとしたものである。一方、武田信一は、『日本書紀』『万葉集』『日本霊異記』『延喜式』などの文献から、土器製塩をおして王権とのつながりを強固なものとした淡路の海人について考察した⁽¹⁶⁾ほか、「淡路国正税帳」の分析から、淡路国からの貢納物は穴以外では塩をはじめとする海産物が大半を占めることを論じる⁽¹⁶⁾など、文献から淡路島の土器製塩に迫る研究を行っている。

なお、淡路島の土器製塩研究において、忘れてはならないのが製塩実験をおした研究である。それを主導した岡本稔の実験は、採鹹、煎熬、焼塩の各工程について、製塩遺跡で検出される遺物や遺構から導かれた仮説に対する検証を行い、土器製塩の実態に迫ろうとしたものであり、土器製塩研究に重要な視座を与えるものとなっている。

二〇〇〇年以降も、富島遺跡や畑田遺跡で脚台式製塩土器がまとまって出土した調査や平城宮

出土木簡にみられる阿万郷に係る律令期の製塩遺跡である九蔵遺跡の調査など、重要な調査が行われ、土器製塩に関する良好な資料が増えているものの、増加した資料の集成作業なども行っていないのが現状であり、それらを踏まえた調査研究の進展が今後の課題といえよう。

二、淡路島の製塩遺跡と土器編年

(1) 淡路島の製塩遺跡

現在、淡路島内で製塩土器が出土する遺跡の数は、九〇か所を超える。その内、遺跡の立地や製塩土器の出土状況などから、生産を行った可能性が高いと考えられる遺跡は三四遺跡である。(表1) それらいわゆる製塩遺跡は、いずれも海岸沿いに立地しており、発掘調査が行われた製塩遺跡では、製塩作業に使用され廃棄された製塩土器が大量に出土する。

(2) 淡路島の製塩土器編年

淡路島の製塩土器編年は、広瀬和雄が提唱した

番号	市域	遺跡名	脚台式				丸底式				備考
			I式	II式	III式	IV式	I式	II式	III式	IV式	
1	淡路市	南所遺跡									
2		楠本塩入遺跡									
3		井上遺跡									
4		平松遺跡									
5		一本松遺跡									
6		並松遺跡									
7		引野遺跡									
8		釜口浜田遺跡									
9		トラス遺跡									
10		責船神社遺跡									
11		小代呂遺跡									
12		宮ノ前遺跡									
13		野嶋遺跡									
14		矢ヶ崎遺跡									
15		畑田遺跡									
16		富島遺跡									
17		机遺跡									
18		浜田遺跡									
19		浜遺跡									
20	洲本市	平安浦塩入遺跡									
21		名子の浜遺跡									
22		石ヶ谷遺跡									
23		山下町居屋敷遺跡									
24		旧城内遺跡									
25		宮崎遺跡									
26		三ツ川遺跡									
27		内田遺跡									
28		高崎遺跡									
29		生石遺跡									
30	南あわじ市	伊毘遺跡									
31		岩谷遺跡									
32		九蔵遺跡									
33		ノダラ浜遺跡									
34		(沼島本村遺跡)									神宮寺又は大黒湯遺跡と同一か？

表1 淡路島の製塩遺跡一覧表

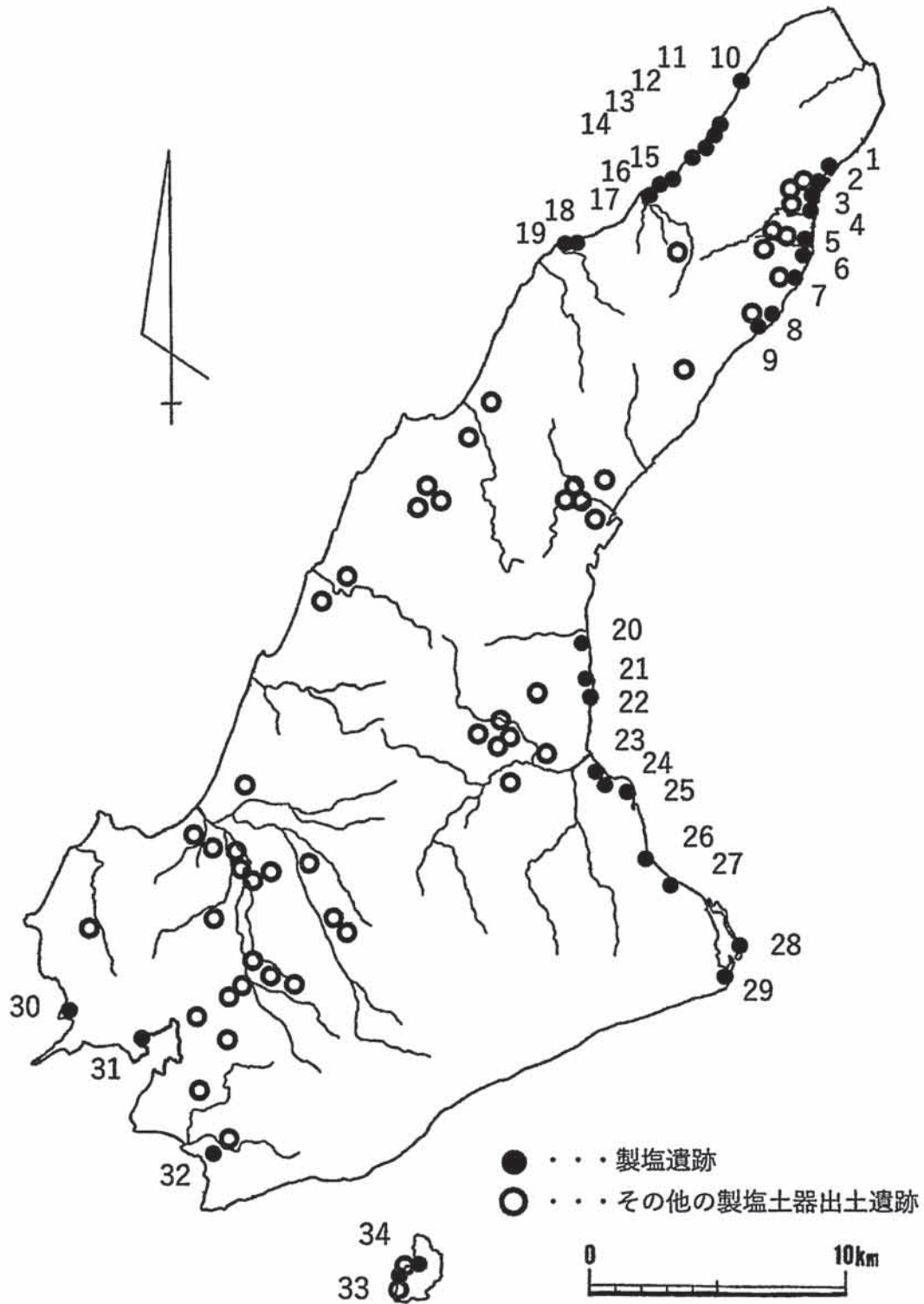


図1 淡路島の製塩遺跡及び製塩土器出土遺跡位置図

大阪湾岸の土器編年⁽¹⁸⁾をもとに、一九九三年に浦上
が提唱した編年案がある⁽¹⁹⁾。それは、脚台付のもの
を 式¹、式、丸底のものを 式²、式の七型式
に分類し、脚台 式は弥生時代後期後半から庄内
式期、脚台 式は庄内式期、脚台 式は布留式期、
丸底 式は五世紀後半を中心とした時期、丸底
式は六世紀代、丸底 式は七世紀代、丸底 式は
八世紀以降の年代を与えるものである。その後、
広瀬編年の脚台 式に相当する資料が引野遺跡で
確認されたことから、それを脚台 式として丸底
式の前段階に位置づけ、都合八型式の土器編年
が用いられている。

この型式分類と土器編年は、脚台式から丸底式
へという型式変化の大きな流れとそれらが使用さ
れたであろう時期に大きな齟齬は無いが、その後
の資料の増加とともに、この中では分類しきれな
い型式が存在することや、同時に複数の型式が存
在する可能性があることなどが確認されつつあり、
大阪湾岸の土器製塩のありようについて積山が指
摘した⁽²⁰⁾ように、淡路島においてももう少し複雑な
あり方をする可能性がある。

そのような状況においては、多様な製塩土器を
総合的に把握し、分析することが必要となるが、
資料の集成作業がなされていない現段階において
は、現在の八型式分類と編年（図2参照）をもと
に、増加した資料を加え、それぞれの型式毎に淡
路島の土器製塩の展開について叙述することとし
たい。

三、淡路島における土器製塩の展開

(1) 脚台式段階の土器製塩

脚台 式

淡路島で発見されている製塩土器の内、最も古
い型式は脚台 式に分類されるもので、淡路島の
土器製塩開始時期に関わる大事な型式と考えられ
る。現在、島内九遺跡での出土が確認されている
が、その内、製塩遺跡は六遺跡である。

いずれも、体部は破損して残っておらず、脚台
部だけが発見されているもので、全体の器形を知
ることができ資料は確認されていない。したがっ
て、脚台部による分類とならざるを得ない型式で

ある。なお、この段階の土器外面には叩き成形痕が認められ、大阪湾岸の製塩土器に共通する特徴を持つ。

この型式は、脚部が丈高である点を特徴とするが、底部の厚みが薄く、裾が八の字形に開くタイプ（A）と円柱形の脚柱部から裾が大きく開くタイプ（B）が認められる。前者には、脚の開きに差が認められるものがあり、後者には裾の開きが内湾するものと外反するもの、開きが弱く直線的な裾部になるものなど、それぞれにバリエーションが認められる。Aを代表するものとして、伊毘遺跡や名子の浜遺跡の資料がある。一方、Bの資料としては、旧城内遺跡、富島遺跡、畑田遺跡などの資料をあげることができる。

この型式の土器が使用された時期は、型式変化の位置づけや製作技法の特徴などから、積山編年⁽²¹⁾の大坂湾 1式に併行する時期と考えられる。

その型式の標識とされている下田遺跡（大阪府堺市）小島北磯遺跡（大阪府岬町）の資料には、弥生時代後期後半第1小様式から第2小様式があげられており、これらの遺跡では後期後半当初段階

での土器製塩の始まりが想定されている。それら大阪府の土器に比べ、淡路島の脚台 式土器は、脚の高さが低く、全体的に小ぶりである。これは、淡路島の地域色とみることもできる一方、次段階の脚台 式に近づいた型式変化とみることも可能である。仮に後者であるとすれば、現在確認されている淡路島の最古段階の土器製塩は、後期後半の中葉以降に位置づけられることになる。その時期を決定しうる良好な資料が無い現状においては、双方の可能性を想定せざるを得ないが、今後、下田遺跡や小島北磯遺跡に類似する土器の有無や淡路島の脚台 式に類似する土器の島外でのあり方などに注目する必要がある。

なお、当該型式の製塩土器が出土する遺跡の数及び土器量は少ないが、その分布は島の北部、中部、南部と全島の範囲に及んでおり、この段階における土器製塩がすでに島内各地で行われたものと考えられる。

脚第 式

脚台 式製塩土器が出土する遺跡の数は一九遺跡であるが、その内、製塩遺跡は一二遺跡である。

伊毘遺跡を除く脚台 式が使用された各遺跡で確認されており、出土する土器量も増加する傾向が認められることから、島内の土器製塩が順調に発展し、定着していく段階と考えられる。

脚台 式土器は、低い脚台から急角度で立ち上がる細身の体部で、上端が開き気味のメスシリンドーのような形の土器である。今出川遺跡の資料に代表される体部が直線的に立ち上がる土器（

A）が大半であるが、貴船神社出土土器にあるように、やや内湾気味に立ち上がる形態（B）もみられ、後者は次段階の脚台 式へ変化する過渡期の器形とみることもできる。脚部も、上げ底になるものや平底のもの、外面に指頭痕が明瞭なものやそうでないものなどのバリエーションが認められる。なお、舟木遺跡では、脚台 式の特徴を持つ製塩土器が伴出しており、この段階の土器製塩は多様な型式の製塩土器が併存する可能性もある。

これらの土器が使用された時期は、舟木遺跡の出土例から、庄内式期第2段階を一つの定点として与えることができ、庄内式期を中心とする時期

の型式である。

この段階の遺跡は、貴船神社遺跡や富島遺跡、畑田遺跡、旧城内遺跡など、次段階以降にも島内で土器製塩の中心的な役割を担う遺跡であることから、淡路島の土器製塩が本格化する段階ととらえることができる。なお、この段階の製塩遺跡の分布は、島の中央部に位置する洲本市域以北に偏る傾向がみられる。

一方で、舟木遺跡や大坂遺跡、行免形遺跡など、弥生時代後期に島北部で急増する山間地の集落でも出土する例がみられる。これらの集落は、庄内式期に急速に衰退し、布留式期には全く姿を消してしまう遺跡群である。庄内式期に活動が本格化する製塩遺跡の分布域が島北部に偏る傾向がみられることは、これら山間地の遺跡群が姿を消す背景に土器製塩の本格化といった動きが関係する可能性もあり、今後注視する課題でもある。

脚台 式

脚台 式製塩土器を使用する段階では、前段階でみられた様な器種のバリエーションは少なくなり、脚台 式土器に単純化する傾向がみられる点

は、大阪湾岸と同様の傾向といえる。本型式が出土する遺跡数は二一遺跡と増加するが、その内、製塩遺跡は一四遺跡とその数に大きな変化はない。このことは、内陸部で塩を消費した遺跡での出土例が増加していることを示している。特に、下内膳遺跡や幡多遺跡、谷町筋遺跡など平野部での出土は、塩の流通量の拡大を想定させるものである。

この型式の製塩土器は、釜口浜田遺跡で出土した完形の土器が指標となる。脚台は、式に比べ小さくなり、丸みを帯びた体部が乗る。足の短いブランデーグラスのような形態である。丸みを帯びた体部は、容量が増加し、一回あたりに煮沸できる鹹水の量も増えたものと考えられる。塩の量産化に向けた変化といえよう。

この型式には、釜口浜田遺跡や舟木遺跡に代表されるように、底部が厚く（脚が高くなる）、体部が斜め上方に開くタイプ（A）と、引野遺跡にみられるように底部が薄く（脚が低くなる）、体部が横方向へ大きく開いた後に上方へ立ち上がるタイプ（B）が存在する。なお、この型式の土器に酷似する脚台部を有する鉢が舟木遺跡な

どで確認されており、脚台部を対象とした製塩土器の認識には注意を要する型式である。

Aの土器は、舟木遺跡で庄内式2～3段階の土器が伴っており、釜口浜田遺跡では布留0式段階の土器が伴っている。このことから、庄内式後半段階には使用が始まる土器と考えられる。一方、Bの土器は、引野遺跡で布留式の新しい段階での使用が確認されている。これらのことから、脚台 式土器は、Aから Bへと時間の経過とともに形態が変化することも考えられる。なお、Aに比べ Bの体部は下膨れとなり、底部からの熱が効率的に内部の鹹水に伝わるとともに、容器下方に重心を持つ器形は安定性を増したものと想像できる。海水を収めることができる容量も増加した器形は、丸底の形態に近づいた変化とみることもできる。

庄内式後半段階から布留式の新しい段階まで、比較的長い期間使用されたと考えられる本型式は、脚台 式から 式にかけて試行錯誤を繰り返した製塩技術が一定の段階まで到達し、安定した製塩が行われた期間の土器であるとみることができ

その中で存在する型式の変化は、塩の量産化要求に応じた形態の変化とみることができよう。

なお、脚台 式に伴う炉跡が引野遺跡で発見されているが、砂浜を掘りくぼめた地床炉が使用されており、この段階での炉の構造は、地床炉が主体であったものと考えられる。

脚台 式

この型式は、脚台式から丸底式へと製塩土器の形態が変化する過渡期の型式と考えられる。出土する遺跡数も六遺跡、製塩遺跡では五遺跡と極限られた遺跡でしか確認されていない。その中で、一定量の土器が確認されているのが引野遺跡である。

この型式の製塩土器は、脚台 式の形態を引き継ぐものであるが、脚部を含めて器形全体が小形化したものとなる。引野遺跡では、脚台が次第に縮小し、脚としての機能を失った痕跡器官へと変化する過程が、 a から d の四段階に細分されており、その後に丸底式製塩土器が成立することが層位的に確認されている。

この変化は、短期間に進行した可能性が高く、

引野遺跡では四世紀末～五世紀初頭の時期が想定されている。なお、引野遺跡では、下層で確認されている脚台 式段階の製塩土器の出土量に比べ、脚台 式段階の土器量が格段に増加する傾向が認められることから、次型式の丸底式成立段階に向けて、より一層の量産化が求められた段階ととらえることができる。

(2) 丸底式段階の土器製塩

丸底 式

脚台式から丸底式への型式変化は、土器製塩における一大画期と考えられている時期である。引野遺跡では、脚台 式の型式変化の末に丸底式製塩土器が成立したことが確認されている。

この段階の土器が出土する遺跡数は、一五遺跡で、その内、製塩遺跡は九遺跡である。この型式も、内陸部で出土する事例が多くみられるという特徴がある。

この型式は、器壁の厚さが一ミリメートル前後と極めて薄く、コップ形を呈する土器で、前段階まで底部に認められた脚台部が消滅し、丸底とな

る型式である。引野遺跡で確認されている口径が約八センチメートル前後、器高が約一〇センチメートル前後の土器（A）と、雨流遺跡で確認されている口径が約五センチメートル弱のもの（B）が存在する。前者には、引野遺跡の砂粒をほとんど含まない精良な胎土のものと、貴船神社遺跡の資料にみられるように細かな砂粒を含み、ざらついた感じがする胎土のものがあるほか、後者には須恵器のように硬く焼け締まるものがあるなどのバリエーションが認められる。

なお、引野遺跡の丸底式土器（A）の底部外面は、丸く並ぶ指頭痕の中央部が僅かに隆起しており、脚台の痕跡器官にみえる。この底部の形態は、誕生したばかりの丸底式土器であることを物語っている。脚台 式から連続する丸底式土器の成立過程から、Aは五世紀初頭には使用されていたものと考えられ、五世紀中葉から増加する Bに先行する型式と考えられる。

なお、この段階の製塩炉は、引き続き地床炉の形態を取っており、紀伊で B段階に使用が始まる石敷炉はまだ確認されていないが、脚台 式

段階に比べ大型化する傾向が認められる。

薄く、小形化した丸底式製塩土器の使用は、熱効率が向上した薄手丸底土器を使用し、一回当たりの操業時間の短縮、回転率の向上による塩の大量生産を目指した技術革新ととらえられており、⁽²³⁾製塩炉の大型化も、それに伴う変化とみることができる。これらの動きは、土器製塩の一大画期中に淡路島の製塩集団も存在していたことを示しているといえよう。そこには大量生産が求められる社会的背景が存在したものと考えられる。

丸底 式

小さな浅い椀型を呈する土器で、楠本塩入遺跡や旧城内遺跡などで出土している。現在、この型式の土器が出土する遺跡は一五遺跡確認されており、その内、製塩遺跡としては一〇遺跡である。

この型式は、口径が一〇センチメートルに満たず、深さも約五センチメートル程度の小さな椀型を呈する土器である。旧城内遺跡の資料にあるように内面に貝殻条痕を持つもの（A）と楠本塩入遺跡などにみられる内面がナデ調整のもの（B）が存在する。Aは、西庄遺跡などで

多く確認されている土器であるが、旧城内遺跡など限られた遺跡の資料以外に出土例は少なく、島内では、Bが大半を占めている。

西庄遺跡でのAは、丸底式のAが姿を消した後、Bとともに最盛期を迎える⁽²⁴⁾五世紀中葉から後半の製塩を担う土器である。一方、淡路島内で分布するBは、使用された時期を特定する資料に乏しく、Aと同時期に存在する土器かどうかについても定かではない。製作技法の面からは、次段階に主流となる丸底式につながる特徴を有している点は、西庄遺跡で六世紀段階に激減し、その後に継続しないAとは異なる。さらに、各遺跡での出土数量は少ないものの、楠本塩入遺跡や貴船神社遺跡、富島遺跡、浜田遺跡、旧城内遺跡、山下町居屋敷遺跡など、次の丸底式段階に大規模化する製塩遺跡で出土していることも注目しておきたい型式である。

丸底式

底が丸い椀型の製塩土器で、丸底式を大形化した形態の土器である。淡路島の塩生産がピークを迎える時期を象徴するかのよう、大規模な製

塩遺跡で大量に出土する型式といえる。出土する遺跡数は二四遺跡で、その内、製塩遺跡は一六遺跡を占めており、いずれの数も増加する。

この型式の土器は、大きさにバリエーションがある。規格的に製作された土器ではないため寸法に基づく明確な分類は難しいが、おおむね口径が一・二センチメートル前後のもの(A)、口径が一・五センチメートル前後のもの(B)、口径が二・〇センチメートル前後のもの(C)に分類できる。口径が大きくなるに従い器壁の厚みも増す傾向にあり、Aは三ミリメートル前後、Bは五ミリメートル前後、Cは八ミリメートル前後で、Cにおいては一センチ近いものもみられる。なお、これらの土器の胎土には砂粒を多く含む粘土が用いられることが基本であるが、内陸の遺跡である天神遺跡で出土した製塩土器(A)では、砂粒の少ない精製された粘土が使用されており、使用する粘土の面からも細分できる可能性がある。

製作技法の面では、粘土紐の巻き上げ、内面をナデ調整し、外面には多くの指頭痕や粘土紐の接

合痕を残す土器である。調整は、Aから B、さらに Cへと次第に雑になる傾向がみられ、Bや Cでは器形に大きな歪みを持つものも多数みられる。製塩遺跡で出土する土器の量も、Aに比べ B、Cが多く、土器層を形成するような出土状況も B、Cに多くみられるものである。このように、本型式にみられる細分型式は、塩の量産化に向けた土器の大型化の結果生じたものと考えられ、時間の推移とともにAから B、Cへと変化するものと考えられる。

これらの土器が出土する遺跡は、A、Bが貴船神社遺跡や楠本塩入遺跡、畑田遺跡、富島遺跡、旧城内遺跡、山下町居屋敷遺跡など、脚台式の段階から継続する遺跡を中心として多くの製塩遺跡で確認されているが、Cはそれ以外にも、浜田遺跡や平松遺跡など丸底式段階に出現し大規模化する製塩遺跡で多くを占める傾向がみられる。これらのことは、量産化に向け、新たな生産場を求めた生産域の拡大があったことを示している可能性もある。

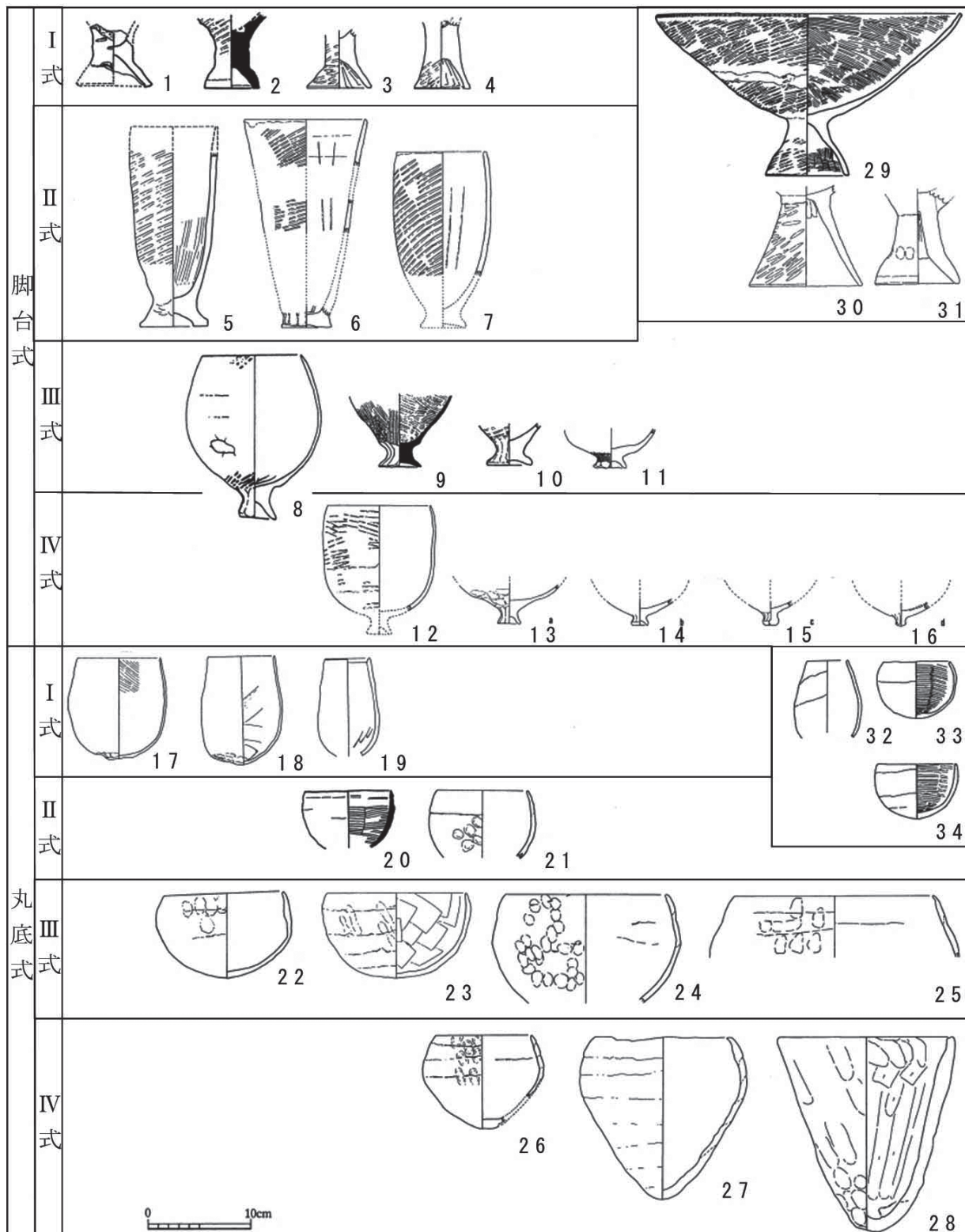
なお、貴船神社遺跡では、この製塩土器に伴う石敷炉が多数確認されており、炉の構造面でも量産化に向けた新たな技術の導入がなされたものと考えられる。

このように、丸底式製塩土器は、淡路島における塩の量産化に伴い使用された土器型式といえる。丸底式における土器型式の変化や製塩遺跡で出土する土器量の増加も、大量生産に伴い大量消費される製塩土器の使用に因るために生じた現象と考えられる。

この土器が使用された時期は、六世紀末から七世紀が中心となることから、淡路島の土器製塩が大規模化する時期もその時期に当たるものと考えられる。

丸底式

尖底で砲弾型の製塩土器で、焼き塩工程で使用された土器とされる。淡路島内では、五三遺跡で確認されており、志筑廃寺や田井A遺跡、下内膳遺跡や谷町筋遺跡、木辺遺跡など、内陸部の遺跡からの出土が多い。一方、生産の場である製塩遺跡では、並松遺跡や貴船神社遺跡、山下町居屋敷



1:名子の浜遺跡 2,20:旧城内遺跡 3,4,24,25:富島遺跡 5:今出川遺跡
 6,7,18,23,27:貴船神社遺跡 8:釜口浜田遺跡 9:高崎遺跡 10:舟木遺跡
 11~17:引野遺跡 19:雨流遺跡 21:楠本塩入遺跡 22:天神遺跡
 26:志筑廃寺 28:田井A遺跡
 29:下田遺跡 30,31:小島北磯遺跡 32~34:西庄遺跡

図2 淡路島の製塩土器

遺跡や九蔵遺跡など一三遺跡で確認されている。

この土器も、形態にいくつかのバリエーションがあり、貴船神社遺跡や志筑廃寺出土の資料に代表される口径が約一二センチメートル前後で口径部が内湾する、器壁の厚さが五ミリメートル前後のやや薄手の土器（A）と、田井A遺跡などの資料にみられる口径が一八センチメートル前後で直線的に開く口径部をもつ、厚さが一センチメートルを超える厚手の土器（B）が存在する。

なお、Aは、底が浅く、小型の志筑廃寺出土土器と、底が深く、容量の増した貴船神社出土土器に細分できる可能性もある。

Aは、志筑廃寺の溝SD 4201出土土器に七世紀末～八世紀初頭の時期が与えられており、貴船神社遺跡の土器は八世紀代の使用が想定されている。一方、Bは田井A遺跡の旧河道1出土の資料に八世紀末～九世紀初頭の時期が与えられている。

この段階の土器が、内陸部の遺跡での出土が顕著であることは、焼塩工程で使用された土器であり、それが運搬容器としても利用されたことを物

語っている。特に、官衙や古代寺院での出土が多くみられることや、並松遺跡（来馬郷）や九蔵遺跡（阿万郷）など、平城宮出土の木簡にみる郷との関係性を想定できる遺跡でのあり方は、律令期における塩の流通を知る上でも、重要な土器と考えられる。

おわりに

現在、島内の最古型式といえる脚台式土器は、弥生時代後期後半段階にあることは確実であるが、この型式の土器が大阪湾岸で確認されている最古段階の型式とどのような関係にあるのか。このことは、淡路島さらには大阪湾岸の土器製塩の開始期を知る上で、重要な視点となろう。さらには、脚台式（式）式については、弥生時代後期の鉄器生産を背景とする淡路島北部の山間地の集落の動態を理解する上でも重要な型式と考えられる。

脚台式の段階は、土器製塩の開始期から安定した技術段階に到達するまでの土器型式とみることができる。漸次的な型式変化と（式）式段階の

複数型式が併存する状況は、時代の移り変わりとともに次第に高まる塩需要拡大に対応する製塩集団の試行錯誤の過程ともいえ、その結果、式の安定した技術段階に到達したのみみることができ

る。一方、その後起こる丸底式土器への変化は、それが短期間に進行すること、それとともに消費された製塩土器量が急激に増加すること、製塩炉が大型化することなど、脚台式段階とは異なる社会的要求の中で生じた現象であることを示唆しているのではなからうか。西庄遺跡にみられる石敷炉の採用も、その中の技術導入と考えられる。引野遺跡の丸底式製塩土器の成立は、淡路島の土器製塩もその変化の中にあつたことを物語っている。しかしながら、島内の生産遺跡としては、井上遺跡、貴船神社遺跡、名子の浜遺跡、旧城内遺跡、高崎遺跡などで B の出土が確認されているが、いずれも出土量が少なく、生産の実態が不明な状況である。和泉から紀伊にかけての地域で生産がピークを迎える時期に、引野遺跡に続く生産体制がどうであつたのか。この段階の土器製塩

を考える上での今後の課題といえる。

丸底 式段階は、淡路島が大規模製塩を行う時期に相当し、大量の製塩土器が消費された型式であり、その中心は六世紀末から七世紀にある。しかしながら、丸底 式製塩土器がいつまで使用されたのかは、それを確定する資料が確認できておらず、不明といわざるを得ない。大規模な製塩遺跡である並松遺跡や貴船神社遺跡などでは、丸底 式に伴い八世紀の土器が出土する事例がみられることから、当該期にも煎熬用土器として使用されていた可能性もある。丸底 式土器が煎熬工程でいつまで使用されたのか。鉄製塩釜の使用開始時期とも関係する課題でもある。

一方、丸底 式製塩土器との連続性についても検討の余地がある。製作技法や形態が類似する丸底 B は、丸底 A との親和性が強く、経時変化の可能性もある。もしそうであるとすれば、和泉や紀伊での大規模生産の時期と淡路島での大規模生産の時期の間を埋める型式の可能性もあり、不透明な六世紀における大阪湾岸の土器製塩のあり方を理解する上で重要な土器となる可能性もある。

る。今後の検討課題の一つである。

今回は、現在の土器編年に沿って、それぞれの型式毎に淡路島の土器製塩の展開を叙述することを試みたが、甕形製塩土器の存在や現在の編年には組み込めていない型式の存在など、扱えなかった資料が数多く残っている。さらに、製塩遺跡の分布といった視点からの検討も行うことができなかった。島内の土器製塩の様相を理解するには、それらを総合的に把握し、分析することが必要であるが、研究の現状と課題を列挙するに止まってしまうことは、ひとえに筆者の力不足であり、このような機会を与えていただいた関係者にお詫びを申し上げたい。また、淡路島における土器製塩研究の歩みにも多くの紙幅を費やした。それは、列挙した課題に対する研究の一助になればとの思いからでもある。拙稿が、少しでも後進の研究に役立つことを願い、筆を置きたい。

- (1) 岡本稔・波毛康宏「兵庫県(淡路)」(『日本土器製塩研究』青木書店、一九九四年)。
- (2) 石部正志「淡路島の土器製塩(予報)」(『日本考古

学協会 昭和四一年度大会発表要旨』日本考古学協会、一九六六年)。

- (3) 岡本稔「淡路島の土器製塩遺跡」(『淡路地方史研究会会誌』七号 淡路地方史研究会、一九七〇年)。
- (4) 田村昭治「淡路島の製塩土器について」(『山下町居屋敷遺跡発掘調査報告』洲本市教育委員会、一九七七年)。
- (5) 近藤義郎「淡路二題」(『考古学研究』第二四巻第四号 考古学研究会、一九七七年)。
- (6) 近藤義郎「淡路の製塩土器」(『土器製塩の研究』青木書店、一九八四年)。
- (7) 櫃本誠一「古墳時代の遺跡」(『日本の古代遺跡三兵庫南部』保育社、一九八四年)。
- (8) 浦上雅史「淡路島の海の生産用具 飯蛸壺・製塩土器を中心に」(『歴史と神戸』第二六巻 第四号 神戸史学会、一九八七年)。
- (9) 浦上雅史(『淡路島の古墳時代』洲本市立淡路文化史料館、一九九三年)。
- (10) 積山洋(『律令制期の製塩土器と塩の流通 撰河泉出土資料を中心に』『ヒストリア』第一四一号 大阪歴史学会、一九九三年)。
- (11) 岡本稔・波毛康宏「兵庫県(淡路)」(『日本土器製塩研究』青木書店、一九九四年)。
- (12) 渡辺昇「淡路の土器製塩」(『シンポジウム製塩土器の諸問題 古代における塩の生産と流通』塩の会シンポジウム実行委員会、一九九七年)。

- (13) 岡本稔「藻塩幻想」(『淡路考古学研究会誌』第三号 淡路考古学研究会、一九八〇年)。
- (14) 「国生み神話」は、淡路島を拠点とする海人族が伝えた島生みの伝承がもたれているとする説。和歌森太郎「淡路民俗の歴史的背景」(『淡路島の民俗』吉川弘文館、一九六四年)、岡田精司「国生み神話について」(『古代王権の祭祀と神話』塙書房、一九七〇年)。
- (15) 武田信一「海人族の世界」(『淡路の神話と海人族』Books成錦堂、一九八七年)。
- (16) 武田信一「天平十年「淡路国正税帳」に関する一考察(一)」(『あわじ』第一七号 淡路地方史研究会、二〇〇〇年)。
- (17) 岡本稔「塩づくり実験からの諸問題」(『古代製塩の島 淡路』洲本市立淡路文化史料館、二〇〇一年)。
- (18) 広瀬和雄「小島東遺跡」(『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会、一九七八年)。
- (19) (9) に同じ。
- (20) 積山洋「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学・別冊14畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣、二〇〇四年)。
- (21) (20) に同じ。
- (22) 河田泰之「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」(『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター、一九九六年)、宮地聡一郎「脚台式製塩土器について」(『小島北磯遺跡』(財)大阪府文化財調査研

究センター、二〇〇〇年)。

(23) 伊藤宏幸(『引野遺跡発掘調査概要』東浦町教育委員会・東浦町、一九九九年)。

(24) 富加見泰彦ほか(『西庄遺跡』(財)和歌山県文化財センター、二〇〇三年)。

註釈は本稿の趣旨に関わるものを中心に記載し、参考とした発掘調査報告書等は割愛した。